居場所探しの旅２

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
居場所探しの旅２

【Ｎコード】
Ｎ８７５７Ｚ

【作者名】
ゴンギツネ

【あらすじ】
『生活系』と『防御系』の能力しか無いこの世界に、俺――ロト＝レイニーは、『攻撃系』の能力を持って生まれてきた。
しかし、そんな俺に好機が訪れる。それは、俺の能力が生かせる異世界――レオスへの移住だった。

異世界と過去について

俺は、いつも避けられていた。あの授業から――

＊＊＊

「今日、能力を調べるぞ」

皆、ワクワクしていた。例に漏れず、俺も。

「説明するぞー。まず、言われるのが能力名で、能力カードってのが、能力が示されているカードな。ちなみに、俺のは『結界』で、半径六メートルに何も寄せ付けないんだ」

じれったかった。五分くらい話を聞くと、体育館に案内された。

「一番前の人から。ローラさん。『鉄壁』ですね。はい、能力カードです」

――そして、俺の番がきた。

「はい、五六番目の方――ロトさん」

「はい！」

「『強化』ですね。え？　強化？」

そこで、先生が呼ばれた。そこからは、途切れ途切れにしか分からなかった。

「これは……」

「でも……」

「しかし……」

「だからといって……」

「もしかしたら……」

「仕方ないが……」

俺は、隔離された。なんでも、「攻撃系の能力は聞いたことがないから」らしい。

＊＊＊

その後は、地獄だった。防御系や、生活系の能力ばかり説明され、攻撃用の能力については、何も教えてもらえなかった。そして、軽蔑の視線を向けられる。……幸いにも、攻撃系の能力が怖いのか、暴力は振るわれなかったが。

＊＊＊

「ここは、どこだ？」

気がつけば、見たことのない場所に居た。……捨てられても、不思議ではないな。俺は、考えたが、すぐにその考えを捨てた。

前方から、大きな殺気。

現れたのは、大きな虎だった。

「ははは、嘘だろう？」

俺は、乾いた笑しか浮かべることしか出来なかった。

俺は、虎に向かって走った。

精霊を吸収することの便利さについて

「っ！？」

虎が、襲いかかってきた。右に飛んで、辛うじて避ける。しかし、転んでしまったのが仇となった。そこに、また虎が襲いかかる。

「身体能力を強化」

激しい痛み。しかし、これで確実に倒せるはずだ！　右の肘で、虎の喉を叩く。そして、喉を抑えつけた。そのまま、右足を虎の前足に引っ掛ける。足払いに似た感じになり、虎は前のめりになる。肘を当てている右手の甲で、虎の後頭部の少し下を叩く。バックハンドブローが、綺麗に首筋に決まる。筋肉がちぎれる音が、聞こえた。

右手の犠牲に関わらず、虎はまだ生きていた。

「トドメっ！」

最後に、鼻を思いっきり蹴った。鈍い音がして、虎は絶命した。

「強化……解除」

そういうと、俺は眠り始めた。

＊＊＊

ロトが寝る。危険がいっぱいあるこの地で寝るのは自殺行為だが、森の主である『ティオス』を倒したことにより、ロトは森の主へ成り上がっていた。お陰で、何にも襲われることなく、眠っているのだった。

＊＊＊

起きると、目の前に熊がいた。急いで戦闘態勢を取る。

「落ち着いて下さい！　我々は貴方に挨拶をしに来ました」

熊は、慌てて用件を言う。それはそうだろう。熊も、死にたくはないのだから。
「……なんで俺はお前と話せるんだ？」
「それは、おそらく、前王――ティオスの精霊が、貴方に吸収されたからでしょう」
「吸収？　精霊？　詳しく話せ」
ロトが、低い声を発する。
「は、はい。精霊が、各生物――微生物にすら宿っているのはご存知ですよね？」
熊は、どもりつつも話した。
「いや、今知った」
「知らないのですか？　……まあ、その精霊が、――憑く者によって強さが違うのですが、貴方に吸収――憑いたのでしょう」
途中で驚いた声を変えたのは、ロトが睨んだからだろう。
それにしても、とロトは考えた。信じられないが、俺は違う世界に来たのか。誰が、いったい何の意図があって――
「で？　なぜ俺に話した」
「それは、貴方がこの森の王に成ったので、挨拶をしにきました」
「そうか。ご苦労様。今度も、呼ぶから」
「ありがとうございます」
熊は帰っていった。
ロトは考えた。――これは、とんでもない好機なのではないか、と。
「治癒能力を強化」
傷口が逆再生する。ぐちゅぐちゅ、と生々しい音が、静かな森に響いた。

町へ向かう道について（前書き）

外道？　ですかね……。

町へ向かう道について

この地に移住してから2カ月はたっただろうか。正確な日数はよく覚えていないが……。しかし、あまり襲われることがなかったから、体が―訛≪なま≫っている。たまに人間だから弱いと踏んで、自信満々で襲ってくる馬鹿もいたが、それも数度で終わった。

＊＊＊

彼は、落ち葉が舞っている赤い森の地面をゆっくり踏んでいた。無音の森で、落ち葉を踏む音が妙に存在感がある。そして、それが心地よく感じるのは錯覚ではないのだろうしかし、無音の森では、少々寂しげもある。矛盾しているが、確かにその通りなのだ。

しかし、その静寂はくぐもった――低い声によってすぐに破られた。耳触りが悪くなるような声。彼は、不快な声の音源を確かめるべく、その方向へ向かっていった。

「助けてくれっ！」

商人らしき者が狼に襲われている。

彼が行くと、商人らしき者は声を発した。

「煩い。黙れ。―塵≪ごみ≫は言葉を発するな」

自分の言葉が通じるのかは分からなかったが、杞憂だった。どうやら、通じるようだ。

「なっ！？　私が誰だかわかっているのかっ！？　貴族だぞ！？」

貴族だったのか……。人はみかけによらないものだ。

「しるかボケ。ここで助けなくてもお前は権力を振るえないだろ？　立場を考えろ。―屑≪くず≫が」

すると、貴族？　の男性は絶句した。

「なっ！？　た、頼む……。金は幾らでもやる……。だから――？」

「金はどこだ？」
「む、向こうの馬車だ」
「案内しろ」
そう言うと、男性は安心したようだった。
「だったら、この魔物を」
「ああ。『邪魔だ。退け』」
ロトは、北大陸言語を使わず、言葉を発した。
「それは、魔物言語か？」
「しらん。さっさとしろ」
ロトは、ぶっきらぼうに答える。
「あ、ああ。こっちだ」
男に案内させると、確かに馬車いっぱいに宝石などが積んであった。
「そうか。では、遠慮なくいただこう」
ロトは、そういうと、馬車を引いていた従者を引きずり降ろした。
「全部とは言ってないぞ？」
「だが、お前は『幾らでも』と言ったはずだ。お前は、約束を破るのか？」
「ぐ……だが……」
「そうか。仕方がない」
そう言うと、貴族の男は、目に輝きを取り戻した。
「じゃあ――？」
「ああ。じゃあ死ねよ」
そういうと、貴族の心臓の活動を『強化』して、心臓麻痺を発生させた。
貴族が、唾液を垂らして無様に倒れる。
「ひっ……」
ロトが従者をギロリと睨んだ為か、従者は悲鳴を上げた。
「どうか命だけは……」
「う～ん。仕方ないなあ」

「ありがとうございます。ありがとう……」
「やっぱごめん。どうせ、このことを話すだろ？　だから、殺す」
「――っ！？　は、話さない！　だから――。ヒ、やめ……？」
「じゃあ、また来世～」
「――ぐっ！？　う……！？」
バタリ、と。従者が倒れた。土埃が舞う。
宝物を前王――ティオスの毛皮に包む。
……かなり重い。
「身体能力を強化」
ばりばりっ、と。痛みが体を襲う。
……しかし。これで早く動ける。
「体の頑丈さを強化」
しないと、体の繊維が切れてしまう。……前に、これなしでやったら一動だけで体が切れた。
ロトは、馬車が向いていた方向をもとに、町へ向かったのだった。

馬鹿な門番のお陰でスルーできた検問について

3時間は走っただろうか。街のシルエットが見えた。
立ち止まって、息切れを直す。急に立ち止まると、心臓麻痺を起こしやすいため、少し前で止まった。
「次の人！」
門番が強く言った。
「は～い」
緊張感のない声でロトが答えた。
「名前は？」
「ロトです」
「身分を証明できるものは？」
「途中で、盗賊に身ぐるみを剥がされてしまいまして」
まるっきり嘘である。むしろ、身ぐるみを剥いだ立場だ。
しかし、門番は同情したのか、「辛いことを聞いて済まなかったな……」と言った。
馬鹿だこいつ……。ロトは思った。手に持っている虎の風呂敷が見えなかったのか。
「じゃあ、金はあるか？」
「ええ」
ロトは、後ろの人から盗った小銭を出す。
「ありがとな。頑張れよ」
そもそも、自称身ぐるみを剥がされた奴に、金があるって聞くか？　しかも、身ぐるみを剥がされたのに金持ってるってありえないだろ。と、ロトは考えたが、親切な言動には、文句は言わなかった。

＊＊＊

美しいとも、綺麗とも言える風景が、門を通ったら見えた。
どこに泊まろうか……。
理解力を『強化』して、動物（主には脅した熊）に人間の情報を聞いた。なんでも、動物には独自のネットワークがあって、森に帰ってきた動物が、他の動物に情報を教えるのだという。
「宿にでも泊まるか……」
ぼそりと呟いた声は、誰に聞こえるでもなく風に乗って流れていった。

＊＊＊

「はいよ。一泊４０００カプ（※1カプ＝1円）ね」
「今日はお願いします」
と言って、盗った金を渡した。
普通に去ろうとしたが、ロトの目に、信じられないものが写った。物理法則を無視したもの――
「おば……お姉さん、それはなんですか？」
それとは、おばさんが出した魔方陣らしきもの六芒星（ろくぼうせい）だった。
「え？　収納の魔方陣だけど……。これがどうかしたのかい？」
「い、いや、そんなもの見たことがなくてね……」
「おやまあ、見たことがない？」
「なにかしら記憶が抜けているものがあるような気がしたんですが……魔法ですかね？」
「記憶が抜ける？　記憶喪失かい？」
「いや、その部分だけすっぽり抜けているんだ」
「へ～……。不思議なことがあるものだねえ……。おっと、不謹慎だったかな」
「いえ、気にしていませんから、お気になさらずに……」
さっきは、取り乱してしまったが、今度からは気を付けなければ……。この町の人が馬鹿ばかりとは限らないから。しかし、とロト

は思った。
魔法……。なんとも魅力的な力だ。欲しい。その力が――
＊＊＊
《魔術師ギルド・入団無料です。魔術、教えます》
何を書いてあるか分からない看板。
「おい……」
野菜を売っている親父に聞く。
「なんだ？」
「そこの看板に書いてある文字はなんと読むんだ」
「《魔術師ギルド・入団無料です。魔術、教えます》だとよ」
「ありがとう。あ、野菜安くしておいてくれよ」
「へへ……。毎度～」
一回目だがな、と心のなかで呟くロト。
「それにしても、文字が読めないのか？」
まずい、なにか不自然だったか。
急いで、１００００カプを渡す。
「秘密だ」
「そうか。すまなかった」
しかし、杖を持った人が行き来しているから、もしかしたらと思って聞いたが……。
明日は、あそこへ行こうと、明日の方針をロトは決めたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8757z/

居場所探しの旅２

2012年1月6日13時49分発行